



# 高楼心譚



吉野 圭



---



# 目次

一.....	1
二.....	4
三.....	7
四.....	9
五.....	12
六.....	15



先生、先生と声がするので、周りを見回すと木陰から白い顔が覗いた。

「英珠」

「先生、お話が」

頬を紅く染めてこちらを真摯に見つめる顔はまだ少年のようだった。

劉綺——字を英珠——はこの頃、確か二十歳になったばかり。私より七歳下の青年は何故か、私を“先生”と呼んでいた。

主人に伴われて私が劉表の邸を訪れるたび、英珠は“先生”を追いかけ回すのだった。

「“先生”などではありません。私は雑用係の身ですよ」

事実を述べても無駄だった。英珠の純粋な瞳は輝きを増すだけだ。

「でもご高名はかねがね、耳にしております。どうか少しか私の話を聞いていただけませんか」

「いいえ。滅相もない。勘弁してください」

頭を下げ、そそくさと私はその場を立ち去った。

何を勘違いされているのだか。

うっかり有名な武将のところへ仕えてしまったために、自分では望まない形で噂されている。“あの人は優秀だ”、“あの人に相談すれば何でも解決する”と街で宣伝している人々がいるらしい。英珠はそんな根も葉もない噂を耳に入れ信じてしまったようだ。

勘弁してくれ、心から思う。

まっとうな理性のある大人なら、このような馬鹿げた噂話を信じたりしない。何の経験もない、出仕したばかりの若造に相談する価値などないと考えるのが普通だ。だが世間を知らない若い人は純粋なために、噂を鵜呑みにして舞い上がってしまう。

私は頭痛を覚えながら、狭い街でのこの噂が早く収束し、英珠が自分を忘れてくれることを祈った。

英珠の相談事が何かは分かっている。

これも街を賑わせている噂、劉表のお家騒動の件だろう。

荊州牧（知事）、すなわち劉綺（英珠）の父である劉表は、後妻への愛に狂い彼女の子へ跡を継がせようとしているという。長子の綺を差し置いて、だ。

後妻は綺の悪口を夫の耳に囁いたり、裏で協力者を募るなどして自分の子を跡継ぎの座へ据える画策をしている。綺の暗殺計画まで企てているとかいないとか……。

残念ながらこの話は単なる噂ではなく、私も間近で接した事実だった。

先日、英珠の食事に毒が入っていた。危ういところで英珠はそれを食せずに済んだ。犯人は誰の目にも明らかだ。しかし堂々とその名を口にする者はいない。劉表に告げたところで事態は解決しないだろう。逆に愛する妻へ濡れ衣を着せたとして、英珠の立場がさらに危うくなるかもしれない。

何より気の毒なのは、劉表が英珠を毛嫌いしていることだった。

“英珠は能力がなくて底意地が悪い。出来損ないの子”、だと思い込んでいる。

後妻が吹き込んだ悪口を真に受けているのだ。血を分けた我が子さえ信じることが出来ない。

親に見捨てられた子ほど憐れなものはない。“出来損ない”と呼ばれ、害虫のように嫌われ、心を踏みにじられる。自分をこの世に生み出してくれた親による否定は、世界による否定。親から受ける冷たい視線、蔑む言葉は身体に対する暴力よりも深く子を傷付ける。

いつも俯<sup>うつむ</sup>き、肩を丸めて歩き、おどおどとした目で周囲を見ている。それでも健気に、弱い笑顔を浮かべて皆に優しさを振りまいている英珠。

そんな彼を見ると身につまされる。父親へ憤りを感じる。

しかし私にはどうすることも出来なかった。口出しをすることは禁物だ。

しょせん私は他人なのだ。他人が何か言ったところで火事を広げるだけのことだ。真っ先に身を焼かれるのは英珠だ。それだけでは済まずきつとこちらまで大やけどを負うだろう。自分一人ならまだ良い。だが当然、主人にも迷惑をかけてしまう。主人へ迷惑をかけることは絶対に避けなければならない。

だいたい私には実力がない。人の問題を片付ける実力など、とうてい。自分の傷さえどうにも出来ないというのに。

良家に沈む<sup>おり</sup>澱をどれだけの人が知っているだろう。

上品な家の底には暗々と、鬱々と、人の卑しさが<sup>よど</sup>澱んでいることがある。

家系。血筋。金。

それらにつきまとう誇りは他者を差別せずにはいられない。下々の庶民より自分たちは優れていると思ひ込むだけでは飽き足らず、同じ家の中でも差別を始める。やがて自分が家族の誰よりも上に立ちたいと欲し、一位の座につくために争いを始める。

私はそのような良家の底辺で差別された人間だ。

父は心労で死に、異母兄は家を早々に出て行き、母は心を病んだ。

踏みにじられた私の心の傷も癒えない。生涯、癒えることはないだろう。

“貴族”と呼ばれる家系ではあるが最上級ではない、そんな格の私の家ですらこのような傷を受けなければならなかった。

まして帝の血を引く劉家で今、渦巻いている闇の深さはいかばかりか。とうてい私が太刀打ち出来る問題ではないと知っていた。

だから私は逃げたのだった。

後ろめたさを感じながらも、すがる瞳を振り切って英珠から逃げた。逃げ回った。

「先生」

にっこりと、屈託のない笑みに出会って私はぎょっと足を止めた。

迂闊<sup>うかつ</sup>だった。

考え事をしながら歩いていたら庭の奥へ踏み込んでしまった。それで避けていたはずの人物に正面から出くわしてしまったのだった。

意外にも英珠は満面の笑みだ。白い顔がやんわりほころんでいる。

ああ、なぜこんなに嬉しそうなんだ。

くらりと来る。あまりの手放しの笑顔に眩暈<sup>めまい</sup>を覚えた。

私はずっと彼を避けてきたのだから、不愉快になり腹を立てるのが当然だろう。それなのに欠片も恨みを見せない瞳は、旧知の友と再会したかのような喜びを放っている。

……勘弁、してくれ。

こんな瞳に私が弱いと君は知っているのか。

離れても、邪険にしても、少しも懲りず疑わずまた向かって来る。こちらは高い壁を作って備えているのに、やすやすと越えてしまう。

自分でも分かっていた。降参は間近だ。

「こんなところでお会いするなんて、奇遇ですね。先生」

いかにも偶然会ったかのように驚いた顔で言う。それから彼は空を仰いで心地良さげに呼吸した。

「今日は良い天気。このような日にお会い出来て、嬉しいです。——そうだ、先生、いかがですか？ この素晴らしい空の下で、ひとつお酒でも。私にご馳走させてくださいませんか？」

〔注記〕

- ・劉キの「キ（王+奇）」は機種依存文字のため「綺」に変えています。
- ・劉キの字、「英（えん）珠（しゅ）」は作者の創作です。

酒に釣られたわけではない。

しかし、その酒は美味だった。

水のように澄んでおり、口に含むとほのかな果実の甘みが広がり、次いで花の香りが漂う。なるほどこんな酒ならば、“神の水”と呼んでいい。酒と言えば黄色く濁り強い匂いを放つものと思っていた。このような上品な香りを抱く水の存在を、私は伝説でしか聞いたことがない。

酒はあまり詳しいほうではない。この若さではまだろくに味も分からない。そんな私でさえ、英珠<sup>えんしゅ</sup>の酒を一口含んだだけで、これは滅多に手に入らない特別なものだということが分かった。

「いかがですか。お味は」

英珠が次の酒を杯に注いだ時、くら、と来た。強い。

「素晴らしい。このような絶品を味わうのは初めてです。何という名の酒で？」

「新しい酒なのです。異民族が持っていたのを父が譲り受けました。米から作るそうですよ。名前は分かりません。香る澄んだ酒と呼ぶことにしませんか」

それよりも神水と呼んだほうがいいと思った。この水には魔力がある。

英珠は楽しげに私の顔を眺めている。

「先生、お強くないのですね」

既に顔が赤くなっているらしい。まったく、恥ずかしい。英珠が言う通り、私は酒に強くない。

「ええ。まあ。ですから、程々で勘弁してください」

「大丈夫。ご主人は父と話し込んでらっしゃいます。夜分まで解放されることはないでしょう。ですから今日はお仕事を忘れて、遠慮なくくつろがれてください」

そう言って英珠は笑顔で、また杯を満たした。

次第に遊ばれている気がしてきた。酒に弱い私を酔わせるのが楽しいらしい。けれど英珠の笑顔を見ていると断れなかった。英珠がこれほど楽しげにしている様子など、見たことがなかったからだ。

か、たん。

その時、不審な物音を聞いた。

音のしたほうへ目をやる。

「ん……」



酔った目でも事態を悟った。梯子がない。

庭園を眺めるために作られた高い建物の上で酒を飲んでた私たちは、梯子がなければ下へ降りることが出来ない。

つまり、私たちはこの場に閉じ込められたのだ。

英珠の表情を見た。慌ててはいない。まさか風で梯子が倒れたわけではないだろう。これは始めから英珠が計画していたこと。予め、彼が誰かに命じて梯子をはずさせたのだ。やられた。

英珠が姿勢を正した。さっと頭を下げた英珠の頬に光るものがあった。

「今なら、天にも地にもあなたの声は届きません。あなたの声は、私の耳にしか入らないのです。ですから、どうか！　どうか私にお聞かせください。あなたのお考えを！」

英珠は泣いていた。声を殺して肩の震えを必死で抑えていたが、その苦しみを隠し通すことは出来なかった。

「私は、どうすればいいのでしょうか。……死ぬべきか……生きて殺されるべきか……どちらを選ぶべきですか。どちらを……」

額を床に付けて泣く英珠を見つめ、私は古い記憶を思い出していた。

暗い、高い天井にこだまする泣き声が蘇る。

あのすすり泣きの声は母なのか、弟なのか。

それとも、私なのだろうか？

数百年、連綿と続く貴族の家系の底に虐げられた私たちの、腹の底から搾り出した苦しみ。生きる価値がないと言われた私たちが、生きていることを示した弱い、精一杯の訴え。あの時、私たちは死んでいるに等しかった。だが、決して心を殺してはいなかった。本心から死にたいと思ったことはない。

誰かが死ねと言ったからといって、死ななければいけない道理があるはずがない。

いけない。

英珠、死んではいけない。

……鼓動が、高い音で打った。

英珠よ、君はこの時の私の気持ちを知っているだろうか。

全てを曝け出した君を目の前にして私の鼓動は高まり続けた。全身に冷や汗が滲み出していた。

恐ろしかったのだ。真剣に尋ねる者に、答えることは激しい恐怖だ。

あの時、君は命がけだった。魂を籠めて私にぶつかって来た。そのような人間に対し、答える言葉は“全て”となる。

答える一言が、この人の一生を決めてしまうかもしれない。

そう悟れば私も命がけで答えなければならなかった。

だから腹をくくった。この人と共に、一言の重みを負おうと。

私は言った。  
「逃げろ、英珠」

### 三

逃げろ！

逃げて、生きろ！

拒絶されるかもしれないと思った。

家から逃げる。それは残酷な行動だ。本人にとっても家族にとってもこの世で最も辛い裏切りであり、別れだ。その残酷を受け入れることは多くの人にとって難しい。

私は祈る気持ちで彼の心に訴えかけた。

頼む、聞き入れてくれ。これしか道はないのだ。

何故だろう。今、目の前の人を救いたいと必死で思った。この人に自分の人生を生きて欲しい。英珠の中にかつての虐げられた自分を見てしまったからか。遠い他人であったはずの英珠の未来が、一瞬にして私の願いとなった。

「何……と仰いました？」

英珠が目を見開いて聞き返して来た。一度きり「逃げろ」と囁いた私の言葉は確かに彼の耳に届いていたはずだ。けれど彼は言葉の意味をまだ呑み込めずにいた。あまりにも危険過ぎる言葉だったからだろう。

焦ってはいけない。彼の心に届く言葉を選ばなければならない。私は深く呼吸して姿勢を正し、彼の瞳を見て言った。

「君は晋の文公しんぶんこうを知っているだろう？」

晋の王子、申生しんせいは国内に留まって殺され、重耳ちゆうじは逃れて後に晋の王（文公）となった。英珠が私の目を見つめて声を失っている。

「ああ、」彼の口からため息が漏れた。次いで、ぼろぼろ涙がこぼれた。

「ええ。ええ。知っています。……ありがとう」

“逃げて、王になれ”と言ったのだった。

かつて国から逃げて機会を狙い、帰って国を取り戻した伝説の文公のように。

逃げて王となった人がいるという過去の歴史は、確かに希望と言えた。

だが私は彼に決して、そのまま実行しろと言ったわけではない。必ずしも戻って来て権力を奪い返さなくても良い。ただ今は逃げて欲しかった。生きて欲しかった。自分の人生を、選んで欲しかった。そのうえで未来にはどのような希望があることも知って欲しかった。

「……どうしてなのでしょう。今まで私には、思い浮かびませんでした。その選択肢は」

家臣に命じて戻させた梯子を降りる時、英珠は呟いた。

私も不思議に思った。どうして人は最も苦しい時に、逃げる、という選択肢を思い浮かべることが難しいのだろうか？

そしてその選択肢を思い浮かべることが出来ずに、どれほどたくさんの人が未来を失い、暴力にさらされて死んでいったことだろう。

「あなたは私に、新しい選択肢をくれた。そのことがとてもありがたい」

結局、私には何も出来なかったのである。

英珠自身が本当は知っていて、目を逸らしていた選択肢に気付かせただけに過ぎない。

言葉は虚しい。何の力も持たない。遠い他人の私には言葉を与えることしか出来なかった。私は、呆れるほど無力だった。

全てはこれからの英珠にかかっているのだ。

逃げるということは生きるための試練だ。留まるよりも遥かに強い意思と勇気が要る。

果たして英珠はその巨大な壁を乗り越えることが出来るのだろうか。想像するだけで難しく、不可能に思える。

もしも失敗すれば英珠は殺されるのだった。邸やしきに戻る彼の細い背中を眺めていると、私のほうが不安にかられ身が引き裂かれそうになった。

だが、信じようと思った。

柔らかく微笑んで手を振った彼の顔が、その時は本当に幸せそうに見えたから。

## 四

その後、私は劉表の邸へ行くことを控えた。

邸で英珠と会って親しげな表情でも見せてしまい、英珠と私との関わりを家人に悟られたら危険だからだ。私に相談したことが露見して英珠が命をおびやかされ、主人へ火の粉が飛ぶことは私には耐え難い。

邸へ行かない理由を、それまでの経緯も含めて全て正直に告白すると、主人は「お前なあ。情に弱いのも大概にしろよ」

とさすがに眉根を寄せながらも

「しかし、英珠を見捨てられなかったんだらう？ お前らしいな。そんな奴だから、俺は好きなんだ」

と笑い飛ばしたのだった。

こういう人だ。

他の主人に仕えていたら激怒され斬り捨てられていたかもしれない。主人の身に危険が及ぶようなことを家臣が仕出かしたなら、斬られないまでも暇を出されて当然だ。私のしたことはそれほど非常識で甘かった。自分の立場をわきまえない行動だった。

ところが主人は“そんな奴だから、好きだ”と言った。

単なる温情ではなく、英珠の命がけの相談と、こちらも命がけで受けた心意気を酌んでくれたものだ。逆にあの時、私が英珠を拒絶していたら主人は怒っていたに違いない——そういう人なのだ。

英珠と直接に会うことはなくなったが、彼の密使が手紙を携えて訪れることは度々あった。

「今すぐ、荷物を抱えて邸を出たい」

そう英珠が書いて来たのは二人で酒を酌み交わした日から、まだ一月も経たない頃である。

私は英珠を抑えるのに必死だった。読んだら焼き捨てろと断り書きを添え、早急に返信を届けさせた。

「今すぐに逃げたい気持ちは分かる。だが、堪えろ。この時機に単身で逃げて生き延びられると思うのか？ 時機を待て。機会はず訪れる」

その機会が本当に訪れるのか私には分からなかった。分からないまま、暗澹たる気持ちで手紙を書き送った。

“堪えろ”と書くしかない辛さは筆舌に尽くしがたい。

自分ならとうてい耐えられないだろう場所に置かれた人の気持ちを想像すると、胸が

締め付けられ気がおかしくなりそうになる。それでも“堪えろ”と言うより他に私には選べない。救援を送る力もなく、脱出のための具体的な方法を考える頭もない私が出来ることは、遠くから客観的に眺めることだけだった。

自分の無力さに苦しみ悶えながら絞り出した言葉に、けなげにも英珠は従った。

私が“堪えろ”と言えば納得し、その通りにした。

稀に見る素直な人だった。そして驚嘆すべき精神力を持つ人だった。だからだろう。前向きな逃亡を果たすことが出来たのは。

翌年明け早々。

英珠が脱出した、という知らせを聞いて私は自分の耳を疑った。あまりにも幸せな知らせだったので一瞬、信じる事が出来なかったのだ。

だが知らせは事実。主人も使いをやって確かめたが、現実のことだった。

しかも“脱出”と言っても、単身で無理に出奔<sup>しゅっぽん</sup>したわけではない。正当な理由によって、周囲の助けを得ながら邸を出たのである。

英珠が堪えて邸に留まっていた頃、江夏太守の地位が空いた。機会を逃さず英珠は、この後任に就くことを申し出た。こうして英珠は堂々と、兵まで引き連れて親元を離れることが出来たのだった。

当然、周囲の者には英珠が“逃げた”ことは分かっていた。

“弱虫”と陰口をたたいている者は多いだろう。

しかし正々堂々、英珠が道理にかなった独立を果たしたことは事実で、誰も表立っては文句のつけようがない。

見事と言う他なかった。

私は嬉し涙して、感謝した。英珠へ好機を与えてくれた天に。彼を助けてくれた周囲の人々に。誰よりも、強い気持ちで堪えに堪え、自ら未来をつかんでくれた英珠に！

「最近、英珠から連絡はないのか」

脱出を果たした後、英珠からの連絡はぱったり途絶えていた。主人は不満げに言った。「あいつはお前への礼も無しか？ お前と会っていなければ未来はなかったろうに。まったく恩知らずな奴だ」

「恩知らず、ですか」

いくら主人でも聞き捨てならない。

「恩とは、形で返すものではありませんよ。連絡も特に必要ありません。知らせがないことは平穩無事な証。彼が無事でいてくれることで、恩は返してもらっています」

お前って奴は、お前って奴は、とぶつくさ呟いて主人は首を振った。

「お人好し野郎が。こういう時は、旨いもの<sup>ひとよ</sup>の一つでも感謝の印として送ってもらいたい、と思うもんだ。それが人情<sup>うま</sup>ってもんだろう」

「旨いもの」

言われて思い出した。

「旨いもの、と言えば、英珠からは以前に上等な酒をいただきました。実に見事な酒でした。あの澄んだ色と、かぐわしい香味は忘れることが出来ません。この思い出だけで、私には充分です」

私の答えを聞いて主人は「阿呆めが」と吐き捨てそっぽを向いた。何故主人のほうが不満げなのか分からず、笑ってしまった。

## 五

夏、劉<sup>りゅうひょう</sup>表が死んだ。

父危篤<sup>きとく</sup>の知らせを聞いた英珠<sup>えんしゆ</sup>はすぐさま馬を飛ばした……、しかし英珠が城へ入ることは許されなかった。

ついに英珠は親の死に目に会えず、葬式にさえ並ぶことが出来なかった。堅く閉ざされた城門の前で英珠は地を叩いて嘆き、号泣したという。

この話を後で聞いて私は胸が潰れる想いだった。

恩、などと周りは簡単に言う。

“逃げろ”と背中を押した私が良いことをしたのだと、そうしなければ英珠に未来はなかったのだと。それは、現実にそうなのかもしれない。

だが全てにおいて良いことをしたのだと私は思っていない。

英珠は未来を得る代わりに故郷——帰る家を永久に失った。覚悟のうえの決断だったとしても、人の子として痛々しく大きな代償だ。

英珠が故郷を失った責任の一端は私にある。たとえ英珠が「あなたに責任はない」と否定しようと、あの時、私は英珠の人生の一部を引き受ける気持ちで言葉を吐いたのだから。

そうであるから、英珠。

私は君から恩を返して欲しいなどと思ったことは、本当に一度もない。

故郷を失うという代償を払わせたことに対して私も謝るつもりはない。

ただ君は君の人生を選び取り、私はその責任の一端を負った。この地上において何がしかの縁で出会った人間同士、お互い対等に差し出せるものを差し出したというだけ。これから君は生き様を、私は自己の言葉の責任を負って生きていく。この対等な人間同士にいったい、何を返し返される必要があるだろうか。

しかし英珠の気持ちは形となって返って来た。

劉表の死から、間もなく。

父の後を継いだ劉綺の腹違いの弟、劉宗<sup>そう</sup>（※宗は実際には、王+宗）は官軍を引き連れた恐ろしい“侵略者”——すなわち曹操<sup>そうそう</sup>が攻めて来ると知って、みずから進んで降伏し土地を明け渡してしまった。



私の主人にとってこの知らせは寝耳に水だった。我々には劉表の死さえ隠されていた。主人は激しい怒りを<sup>あら</sup>顕わにしたが、既に降伏してしまったものをどうすることも出来ない。

我々は主人を慕ってついて来た十万の民とともに逃れるしかなかった。

城へ籠もり抵抗しようと試みたが移動の途中で追いつかれ、無<sup>む</sup>辜<sup>こ</sup>の民たちは曹操の兵に虐殺されてしまった。我が軍も壊滅的打撃を受け、再起は不可能に思われた。

我々が傷付き打ちひしがれていたその時、支援を申し出たのが英珠である。彼は弟とともに曹操へ降伏しても当然の立場だった。だが降伏せず、兵を連れて我々の主人のもとへ駆けつけた。その兵数……、

「一万！」

話を聞いた時、私は感激して声を上げた。

聞いたのは申し訳ないけれど、全てが終わった後だった。戦闘に勝利し、私が無事に使者としての役目を終えて解放された直後、迎えに来た部隊に聞かされて知った。長らく軟禁されていたため外の状況を知ることが出来なかったのである。（※筆者の長編小説『我傍に立つ』の設定）

あの時、私は使者として緊急の任務を負い、一足先に同盟先へ赴いた。

後を追って進路を変えた主人は、道中で一万の兵を率いた英珠と出会ったという。

一万の兵。

それも訓練された、体力の有り余る健康な兵だ。

なるほど、我々の同盟相手（呉の孫権）が対戦を決断するに十分な救援だった。敵の兵数は公に十万から十五万と言っていたが実態はせいぜい七万か八万。同盟相手の三万の常備軍に加え、我々の残兵、加えて主人の名声による民の結束があれば必ず勝ると私は考えた。考え、相手の頭首に進言した。

けれど同盟相手は、さらに確実な一万の兵力という保険を見込むことが出来ていたのだった。このため安心して決戦を選ぶことが出来たのだろう。理にかなっていた。

赤壁<sup>せきへき</sup>戦において、あれだけ徹底して周到な作戦を立てた呉の人々であるから、数の理屈に支えられた部分は大きいに違いない。英珠の兵がなかったら、もしかしたら同盟相手は決戦に踏み切らなかったのかもしれない。

「王子さまに感謝しろよ」

迎えに来た精鋭部隊の面々は私を馬の背に乗せながら言った。

王子さまとは劉表の長男である英珠のことらしい。これから“王”、つまり荊州を治めることになる人だからそう呼ぶのだろう。

「もちろんです」

興奮冷めやらない私が勢い込んで答えると、ぼそり、「連れてってやっから」と返って来た。その言葉に違<sup>たが</sup>わず精鋭部隊は遠回りをし、英珠が布陣していた地を通った。

引き上げていく軍の前方に、見覚えのある細い背中を見つけた私は彼を呼んだ。

「エンシュ！」

笑顔で手を上げる青年は確かに英珠だ。馬が近付いて行く。しばらく見ない間に、面立ちが引き締まった気がする。馬から降りて話し込むほどの時間は許されなかったが、精一杯の感謝を叫んだ。

「英珠……ありがとう、ありがとう！ この勝利を得ることが出来たのは、君のおかげだ」

英珠は眩しそうに目を細めて馬上の私を見返した。

「何を仰います。ささやかな恩返し。これだけでは足りないほどの」

「足りないだって？ 充分過ぎる。今度はこちらが何を返せばいいのか分からず、困ってしまう」

言うと、英珠はまた目を細めて笑ったのだった。

「あなたがお困りにならなくてもいいんです。これは私がしたかったこと。心から、自分でしたいと思ったことをしただけですから」

## 六

「英珠、君は死んだ」

赤壁戦から時が過ぎたその日、仰臥する青年に私は語りかけた。

「君の葬礼も済んだ……、劉綺の人生は終わったのだよ。だから心安らかになっていい。もう何も、君の心を煩わせることはない」

眠る青年の頬は血の気を失い青ざめていたが、穏やかだった。

閉じられたまぶたへ落ちる睫毛の影は濃く深い。

と、その影が揺れた。

微かに開かれた瞼の隙間から輝く瞳が私を見つめていた。

「本当に……？」

まだ弱々しい声だった。しかし瞳が放つ光は強い生氣を持っている。

「ああ。本当だ。公には君は病で亡くなったと発表されている。君があのような捨て身の行動に出たことは公表されていないし、まして」

「生きているなど、誰も知らない？」

ふ、と笑った英珠の頬はまだ青ざめている。

「そう。私とここにいる医師と、主人以外に。誰も知らない」

血溜まりの中で座り込んでいた時には友人を失ったと思った――。

あの戦闘勝利後。

荊州牧の位につき、“王”となった英珠だった。

ところが地元の民たちは、今回の大戦勝利で英雄としての名声が高まった劉備が牧の位につくことを強く求めた。

お家騒動を乗り越えたと思えばまた、新たな騒動に巻き込まれる。

追いつめられた英珠は自らの立場に疲れ果てていた。

いつしか英珠の心に芽生えた希望は“自由”という言葉、一つになった。思えば英珠は子供の頃から立場に翻弄されてきた。そんな英珠が心の底から願っていたのはもはや“王”の地位ではなかった。名誉でもなく、領土でもなかった。一個の人間として自らの意志で生きる、ただその叶えがたき自由な人生だった。

あの時、我々の主人に譲位を宣言したのは彼の最後の挑戦だったのだ。

「譲位を受け入れてもらえないならこの場で命を絶つ」

とまで言い、喉元に刀を突き付けた英珠の決意は本物だった。

自由を望み、その自由が与えれないなら自ら自由を得るまで……と。

(※以上、『我傍に立つ』第六章の設定)

英珠は自刃<sup>じじん</sup>した、と思われた。

室内から運び出される英珠の身体を呆然と見つめていた私は、もう友人の命はその身体から旅立ってしまったのだと思い込んだ。

泣いている暇もなく友の葬礼の手配に追われていた最中、「英珠が生きている」と医師から知らされた。

傷は幸いにも急所をはずれていた。

大量の血を流してしまっただが、若さゆえ奇跡的に体力が快復<sup>かいふく</sup>した。そう医師は語った。

しかし私は英珠に生きる意志があったからだと考えている。何より英珠の“希望”が、自由な未来を求める心が命を現世に繋ぎ止めさせたのだ。

「済まないことをした。本当に済まなかった……英珠」

しばらくぶりに目を覚ました友の手を取った時、力なく握り返して来た手の冷たさに私は驚き、堪えきれずに謝っていた。幾度も謝る私を彼はぼんやりと見つめ、喉の奥で笑った。

「ええ。ほんとうに、ひどいですよ。あなたまで私が死んだと思うなんて」

済まない。

泣き笑いで繰り返した私に英珠は真っ直ぐな視線を寄越した。

「死ぬわけ、ないではないですか。やっと手に入れた未来。あなたが、背中を押してくれて手に入れた人生を、手放すわけが」

「そうだ……そうだな。君は強い人だ。自分で未来を手に入れることが出来る人。そんな人が死ぬはずがない」

私は瞼を強く閉じて口の中で呟いた。

“生きていてくれてありがとう”

それから、

「しかし劉綺は死んだ」

宣告して私は瞼を開いた。力強く見返した英珠の瞳を覗き込んで告げる。

「全て整えてある。劉綺は病で亡くなったとされ、領民も納得している。葬礼は済み、劉綺英珠の人生はこれで終わった。ここから君には、」

既に覚悟を決めている英珠の瞳が、先を促すように輝いた。

「新しい名、新しい人生が待っている」

英珠には諸葛<sup>しよかつ</sup>の名を与えた。

帝の系譜<sup>けいふ</sup>にある英珠の姓に比べれば、諸葛は遥かに下位の姓だ。その下等な姓を上位者に“与える”とは無礼にも程があるが、その姓を使えば住む家について問題がなくなるのだから仕方がなかった。

領土内にはちょうど空家となっている家があった。  
私がかつて住んでいた里の家だ。均<sup>きん</sup>も出て行った今、住む者もなく荒れている。  
あばら家で申し訳ないが、私のもう一人の弟ということで彼が空家に暮らすようになれば、里の人々もこの“弟”を大歓迎してくれるはずだ。  
こうして彼が諸葛となり、里に身を隠していれば当面は何の心配もなくなるのだった。危険からは遠く離れ、食べ物も十分に得られる。温かい付き合いをしてくれる人々の存在も既にある。  
やがて一人で暮らしていけるだけの力を蓄えた後に、彼が他の場所で暮らし、他の名を名乗ることは自由。その時には彼はもう、私の手の届かない遠い未来にいる。

別れの日には言葉は要らなかった。  
城門を出る時に振り返り、眩しげに目を細めた英珠の顔は笑顔だった。笑顔のまま小さく頭を下げてから前を向き、彼は新しい道へ踏み出して行った。  
生まれて初めて供も連れず、ただ一人の自由な身として歩いて行く背中が逞しい。  
密かに主人と二人、城門の見張り台から彼の旅立ちを見送っていた私はその背中を見て、  
“ああ、二度と会えないのだな”  
と唐突に悟った。  
理屈を越えた確信だった。会おうと努力すれば会うことも可能だ。これまでがそうだったように。だがもう、お互いそうはしないだろうと悟った。あの強い背中を見れば、その必要はない。だからこれはきっと今生の別れとなる。  
「泣かないのか？」  
突然、笑いを含んだ声が物思いを破った。横を見ると主人の笑顔があった。  
「泣きません」  
「ほう。お前にしてはめずらしい。これでお友達とは会えないかもしれないんだぞ」  
「分かっています」  
主人は笑ってからかう。  
「無理すんな。あいつが死んだと思った時には真っ暗な顔してたくせに。ほら、泣きたかったら泣け。俺の胸、貸してやるから」  
「ありがたいお言葉ですが、遠慮しておきます」  
「そうか？ 残念だな。俺がこれほど親切にしてやることは滅多にないのに。次はないぞ、次は」  
いったい誰のせいで肝を冷やしたのか。今回の事件の元凶となった男の滅らない口に苛々しながら、その声が弾んでいることに気づき私はつい微笑んだ。  
主人も喜んでいるのだ。  
立場上、己の信念を曲げることが出来なかったために英珠の譲位を聞き入れることをしなかった主人。しかし一人の人間として、若者の幸せな未来を望まない人ではない。いや、本当は誰より英珠の不幸な生い立ちに心を痛め、密かに心配をしていたのだった。

だから私の願い通りに英珠に新しい名を与え、新しい家で住む手はずを整えてくれた。今やこの土地の最高権力者となった彼の協力がなければ、全領民に秘密の計画がこれほど思うまま進んでいたはずがない。

劉備とはこういう人だ。生まれつき人としてごく自然の情けを持ち、抑えきれない温かい心を持つ。

「それにしても惜しむらくは、英珠が届けてくれる旨いものを二度と口に出来なくなったことだな」

……そう、そして自然の食欲も。

主人がぼそりと呟いていた卑しい言葉に私は脱力した。

「まだ言いますか？ 仕方がないでしょう。我慢してください」

「我慢するには惜しい、あれは惜しい味だ」

英珠の酒をあの後、主人も口にすることがあるのだった。入手の経路は英珠しか知らない。従って英珠が去れば酒ともお別れだった。

「もし我慢出来なくなったら心で味を思い出せばいいでしょう。良き思い出があれば、充分なのではないですか」

言うど主人はじっと私を見つめ、「お前はそれでいいのか」と訊いてきた。私は小さく笑った。

「ええ。いいのです。別れこそ、未来なのですから」

生きて別れがあるから未来があると思う。

この別れは未来が得られた証。

彼は新しい人生を歩き出した。だから後ろを振り返ることは決してない。振り返るべきではない。

過去にいた人間、たとえば私のことなどは忘れていい。

忘れるほど夢中で幸せになってもらえたら、私が彼の過去にいた価値がほんの少しはあるということになるだろう。

いつか遠い時の果てに再び巡りあうことがあれば、その時は思い出を持ち寄り笑い合いたい。希望通りに生き抜いた人生の思い出を。

前を向いて歩き続ける青年の背中は地平線の彼方に消えて行った。

夕陽を浴びた大地の先に輝いていたのは確かに、彼が掴んだ自由という名の未来だった。

\* 『平話』 異聞 ※

諸葛亮の弟は均のほか一人いて、名を英といった。

彼は亮の故里に住み、妻を娶って九人の子を持ち、家を大きく盛り立てた。

英はその生涯を通して豊かで健康で、家族に囲まれ幸福に暮らしたという。\*

<了>

※『平話・異聞』は“英”の名を除けば実在する民間伝承の引用です

---

高楼心譚

---

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---